気仙沼市立大谷小学校における学校防災・防災教育の特徴：「宮城県地域連携型学校防災体制等構築推進事業」のモデル校としての実践を通して

佐藤　翔輔

１．はじめに

2011 年東日本大震災を受けて，宮城県教育庁は，いかなる災害においても児童生徒等の命を守れるよう，大川小学校事故の教訓や宮城県学校防災体制在り方検討会議報告書の提言等を踏まえ，児童生徒等や教職員の災害対応力の養成や，地域の災害特性を踏まえた地域ぐるみの学校防災体制の構築等が求められた。このことから，宮城県教育庁は，大学等専門機関の助言等をもとに，地域や関係機関等と連携した学校防災マニュアルの見直しや避難訓練等を行うとともに，教職員及び児童生徒等に対し，様々な状況下での災害にも対応できる判断力や命を守る行動力の育成を図る取組を行うなど，各学校の参考となるような地域ぐるみの新たな学校防災体制等の構築に係る優良事例を創出し，その成果を広く普及することにより，県全体における学校防災の一層の推進を図る「地域連携型学校防災体制等構築推進事業（以下，推進事業）」が実施された [1)]。同事業では，1）地域や関係機関と連携した学校防災マニュアルの見直し及び避難訓練の実施，2）地域と連携した災害特性を共有するワークショップ等 の実施，3）教職員の災害対応力を養成する校内研修の実施，4）被災地訪問等を取り入れた児童の防災意識を高める防災教育の実践を実施することが求められている。

気仙沼市立大谷小学校は，2021 ～ 2022 年度の 2 年間，宮城県教育委員会及び気仙沼市教育委員会より，推進事業のモデル校として指定を受けた [2)]。同校は，東日本大震災の発生時には津波によって校舎 1 階部分，体育館，プールが浸水の被害を受けた。3 割の児童が住まいを失い，多くの児童とその家族が避難所での生活を余儀なくされた。校庭にはプレハブ仮設住宅が建設され，長い間使用することができなかった。

筆者は，事業のなかで同校の学校防災アドバイザーを担当した。本稿では 2 年の間に行われた同校の取り組みのうち，特筆すべき活動について紹介する。

２．大谷地区幼小中公防災連携協議会と合同訓練（実践１：地域や関係機関と連携した学校防災マニュアルの見直し及び避難訓練の実施）

同校が位置する気仙沼市大谷地区には，「大谷地区幼小中公防災連携協議会」という組織が 2013 年に設立された。同協議会は，その組織名のとおり，地区内の幼稚園，小学校，中学校，公民館が防災上の連携を行うための協議会である。多くの地域では，それぞれの学校・施設が，それぞれの時期・タイミング・想定で訓練を行われているが，同地区では，これらの学校・組織が同一想定で，同時に合同で避難訓練を行うこととしている。実際の災害での状況を再現する，より実践的な避難訓練であると言える。コロナ禍の影響で，しばらく同協議会および合同の訓練は，開催されていなかった。推進事業をきっかけに 2021 年度より再開された（写真 -1）。同協議会には，気仙沼市危機管理課，大谷地区振興会連絡協議会，学校防災アドバイザーも参加する。

同協議会の意義は，「顔が見える関係」を構築することができることである。災害が起きたときに，地域内ではじめて顔を合わ

東北大学災害科学国際研究所

写真 -1　大谷地区幼小中公防災連携協議会

せるのではなく，合同訓練の開催を目的にして，訓練内容のすり合わせ・調整を行うプロセスによって，関係性を構築することができる。2022 年 4 月に幼稚園近くで大規模な火災が発生した際には,「津波」「火災」とハザードや発生時間の想定が異なるものの，日頃の関係性をもとに園児の緊急退避において，関係者間で連携して臨機応援な対応がとられた。

大谷地区幼小中公合同避難訓練は，2021 年 6 月 22 日, 2022 年 6 月 6 日に実施された（写真 -2）。1 回目の訓練では, 一度に多くの児童・生徒が移動することによって合流地点等において滞留が発生し，衝突の危険や移動速度の遅延が観察された。これは。合同にて一斉のタイミングで実施したことが初めて明らかになった事態である。このことを受けて，幼稚園では民地を活用した短縮ルートの開拓，小学校の避難ルートの変更を行い，2 回目の避難訓練ではスムーズな移動が実現した。前者の民地を短縮ルートの活用は，連携協議会の枠組みがあったからこそ, 連絡･交渉がスムーズに実施できたと言える。また，雨天となった 2 回目においては，中学生が小学生を，小学生は幼稚園生を気遣う場面も見られ，幼小中公の合同で協議会・訓練を行う効果を大きさが確認できた。

アドバイザーを担当した筆者としては「草刈り」「お礼」を重要視した。同地区の避難場所は，高台にある空き地となっている民地である。この避難場所の草刈りを，4 学校・施設の教職員が行うことと，訓練後に所有者や地域で草刈りに携わった住民に児童生徒からお礼を伝えることを要望した。避難場所になっている民地は，同地区共通・共有の資源であること踏まえての提案である。草刈りを行うこと，訓練後に児童生徒からお礼を伝えることは，この地域共有・共有の資源を維持するうえでは必須であると考えた。特に，草刈りについては，避難環境の維持管理および避難経路の確認の機能を有しており，これを地域で実施していた岩手県洋野町八木では，東日本大震災において犠牲者ゼロであった[3)]。大谷地区においては，2021 年からこの「草刈り」「お礼」の 2 つはつづいている。

3．保護者や来訪者に向けた防災学習の発表（実践２：地域と連携した災害特性を共有するワークショップ等の実施）

大谷小学校では，3 ～ 6 年生が保護者に向けて，総合的な学習の時間に学んだ防災学習の成果を学習発表会で披露した（写真 -3）。

写真 -2　大谷地区幼小中公合同避難訓練

写真 -3　学習発表会（地域と災害特性を共有する防災発表会）

3 年生は，総合的な学習の時間「身近な場所の避難の仕方を考えよう」の導入段階で，地域防災について焦点を当てた地域探検を行った。学校周辺の地形や標識を調べたり，地域の方にインタビューしたりしながら震災への理解を深め，学んだことをグループで話し合って整理し，防災マップを作成し，同成果を学習発表にて発表した。6 年生は，総合的な学習の時間「探ろうふるさと，考えよう大谷の未来」で大谷地区のまちづくりについて学び，その視点の一つとして大谷地区の防災について学習した。「大谷里海づくり検討委員会」の三浦友幸氏から，大谷地区における東日本大震災の被害の様子や復興に向けての住民の思いなどを聞き取り，大谷地区の防災に対する理解を深め東日本大震災の被害の様子や防潮堤の役割をそれぞれ発表した。

大谷小学校区内には，2021 年 3 月に開業した道の駅「大谷海岸」がある。気仙沼市で唯一の道の駅であり，多くの観光客で賑わう場所である。この道の駅には，施設内にある「観光情報コーナー」に 6 年生が作成した「防災ポスター」を展示した。展示は，主に観光客が多く集まる夏休み期間に行った。

この 2 つの取り組みは，「もしかしたら関心が高くない大人」を巻き込む効果が期待される。地域住民にとっては，なんらかの防災の説明会を開催する場合，一定以上の関心をもつ人に参加が限られるだろう。道の駅を訪れる観光客にとって，観光スポットに，例えばハザードマップが掲示されていても，それに目を向ける人も多くないことが想像される。それが「うちの子ども・孫の発表」であることや，「観光で訪れた先の子どもたちの取り組み」であることは，より多くの大人の目に触れることにつながる。定性的な観察結果ではあるが，学習発表会には保護者から高い関心が寄せられ，道の駅では足をとめる観光客が多くいた。

４．災害伝承の活用（実践２：地域と連携した災害特性を共有するワークショップ等の実施，実践３：教職員の災害対応力を養成する校内研修の実施）

大谷小学校の近くには「お地蔵様」がある（写真 -4）。東日本大震災発生時に，大谷地区住民の避難誘導に当たって命を落とした千田浩二警部をしのんで建立された。警部は明るく人柄がよく，地域の祭りなどにも積極的に参加するなど，地域のみなさんに慕われていた。震災当日は，警部の「逃げろ」の呼び掛けで助かった方が大勢いた。毎朝，小中学生や地域の方々が頭を下げて手を合わせて拝む姿が見られる。東日本大震災発生時はまだ生まれていなかった子供たちも，「お地蔵様」を通して地震・津波への対応を意識しながら生活している。児童のなかで自然と受け継がれている日課であ

る。お地蔵様の周辺には，特段説明書きのようなものはない。このお地蔵様の由来等は，むしろ異動で着任する教諭側が知らないこともある。お地蔵様の由来等についてまとめられたニュースアーカイブ[4] 等を全職員で視聴することなっている。

宮城県復興支援・伝承課では「みやぎ災害伝承ポスターコンクール」を開催している。災害伝承をテーマとするポスターを小学生・中学生・高校生夏から 9 月にかけて募集している。後述するように，大谷小学校では 4 年生が市内にある「気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館」を訪問したうえで，全員がポスター作成し，同コンクールに応募した。小学生部門 13 受賞作品のうち，同校児童の生徒作品は，特別賞（写真 -5），優秀賞，佳作 3 件と計 5 件が占めた。

写真 -4　大谷地区にある千田浩二警部をしのんで建立されたお地蔵様

写真 -5　特別賞を受賞したポスター

5．震災遺構の訪問による教員研修と防災教育を取り入れた教員研修（実践３：教職員の災害対応力を養成する校内研修の実施，実践４：被災地訪問等を取り入れた児童の防災意識を高める防災教育の実践）

教職員は「石巻市震災遺構 大川小学校」と「気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館」に，児童は「気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館」にそれぞれ，研修・防災教育のために訪問している（以下，大川小，気仙沼伝承館，写真 -6）。気仙沼伝承館は 2019 年 3 月に，大川小は 2021 年 7 月に公開となっている。同訪問の前時点において，教職員・児童とも気仙沼伝承館に行ったことがある人はわずかであった。大川小は，オープン間もないということもあるが，1 人の新任教諭を除いて訪問歴のある教職員はいなかった。このような「あまり行ったことがない」というのは，東日本大震災の被災地でよく見られる状況である。同校では，推進事業がきっかけとなり，訪問が実現した。また，コロナ禍の影響で，都市部への校外学習や修学旅行が控えられ，震災遺構等の訪問にシフトした学校が多くなったことで，被災地学校の訪問は昨今増えてきている傾向にある。

気仙沼伝承館では，4 年生児童から「当時，私達は小さくて何も覚えていません。ここにいる大人のみなさんに聞きたいのは『当時』の雰囲気です。教えてください」と伝承館スタッフや教諭に質問が投げかけられた。この質問がきっかけで，児童と大人の間に対話が生まれた（写真 -7）。「子どもからなかなか聞きづらい」「大人からも，積極的には話しづらい」そのような被災地における「見えない壁」が壊れた，時間であった。対話が終わって，バスのって帰るころの児童達の顔はとても晴れやかだった。「被災の実際・実物を自分の目で見る」ことの意義は大きく，その後の教職員や児童が推進事業に取り組む姿勢が大きく変わったことは言うまでもない。そのことは，前述のみやぎ災害伝承ポスターコン

写真 -6　大谷小学校による震災遺構の訪問（左:教職員による石巻市震災遺構 大川小学校の訪問，右：4 年生児童による気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館の訪問）

写真 -7　気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館でのふりかえりの様子

クールにおける児童の活躍や後述の教職員の「全員プレー」の様子からもよく分かる。

6．おわりに代えて：「たより」と「全員プレー」

ここまで紹介した内容は，同校が推進事業のなかで「見て分かりやすい，かつ特徴的な活動」に焦点を当てて，若干の考察を加えたものである。一方，大谷小学校の取り組みにおいては「決して華やかではない，地道な取り組み」が常にあった。

一つは，「大谷地区防災だより」の発行である（写真 -8）。これは，前述した大谷地区幼小中公防災連携協議会の事務局である大谷小学校が，大谷地区の安全･防災に関する情報，幼稚園・小学校・中学校の防災教育活動，合同避難訓練の説明・ふりかえり，地域内の協力者（避難場所やルートの提供者）の紹介などを掲載して，年に 2 回，地区内に配布・掲示している。これが，「学校の活動の見える化」であり，地域と学校の関係性構築につながっている。

もう一つは，同推進事業を「全員プレー」として全教員で対応にあたったことである。授業研究においては，あるクラスの防災授業に全教員が参加し，その放課後に「事後検討会」が開催され，グループワーク形式で当該に対する徹底的な検証・ふりかえりが実施された（写真 -9）。前述の合同避難訓練や学習発表会を含めて，全教員が防災教育に取り組んでいる。学校での防災教育や学校防災は，一部の担当教員にまかせがちになるところも少なくない。こういった「全員プレー」が，充実した防災教育や学校防災には欠かせない。

最後に，2022 年 12 月に実施された地域と災害特性を共有する防災発表会において，6 年生の発表の最後に，児童がこれまでの学びを総括して話した言葉を掲載する（表 -1）。大谷小学校の取り組みは，実績研究報告書[5),6)]にも詳しい記載がある。あわせて参照されたい。

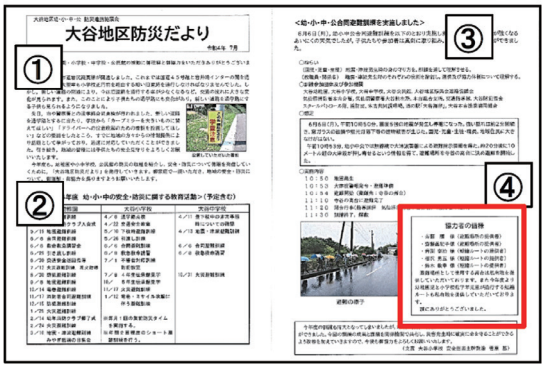
大谷地区防災だより

写真 -8　大谷地区防災だよりの例

写真 -9　授業研究における事後検討会

表 -1　一連の学習を終えて，学習発表会の場において 6 年生が総括した言葉

防災に関して調べた内容はグループによって違いますが，すべてに共通していることがあります。それは，地域の人々の思いや震災の記憶を受け継いでいくことが大切であるということです。私たちの住む大谷では，海の幸が豊富に獲れること，海水浴場があることなど，普段から海の恩恵を生かして生きています。しかし，自然は時として，私たちに試練を与えてきます。これまで，様々な人たちから震災に対する教訓を受け継ぎ，沢山のことを学んできました。様々な人たちの支えがあって，私たちは大谷で安全に暮らすことができています。これからは，一人一人が自分にできることを考え，私たちが大谷を支えていく番です。

謝辞

気仙沼市立大谷小学校の鈴木久美校長，菅原基主幹教諭（当時）をはじめ，同校の教職員・生徒，大谷地区幼小中公防災連携協議会，宮城県保健体育安全課の関係者の皆様に感謝申し上げる。

参考文献

1）保健体育安全課学校安全・防災班：地域連携型学校防災体制等構築推進事業，https://www.pref.miyagi.jp/site/gakkou-anzen-bousai/chiikirenkei_bousaisuishin.html
2）東日本放送：店舗兼倉庫から出火　火はほぼ消し止められけが人無し　宮城・気

仙沼市，2022 年 4 月 14 日
3）佐藤翔輔，今村文彦：東日本大震災における「津波による犠牲者ゼロ」の地域を対象にした探索的調査，地域安全学会梗概集，No. 40, pp.181−182, 2017.
4）仙台放送：震災の犠牲になった警察官をしのぶお地蔵様「無言の語り部」として今も子どもたちを守る，2020 年 9 月 19 日
5）気仙沼市立大谷小学校：令和 3 年度「地域連携型学校防災等構築推進事業」における実践研究報告書，https://www.pref.miyagi.jp/documents/40688/r3kesennuma.pdf
6）気仙沼市立大谷小学校：令和 4 年度「地域連携型学校防災等構築推進事業」における実践研究報告書，https://www.pref.miyagi.jp/documents/40688/r4kesennuma.pdf